

デガートのご注文は？

Story by Makoto Nekoya

お話の背景

例によって銀英伝にして銀英伝にあらざる設定：原作でヴァルハラや天国への門をくぐってしまった方々の大半が、なぜか幸せに生きているという：です。このお話の直前(帝国暦一〇年)、銀河帝国をゆるがせた大きな内乱が、ロイエンタール、オーベルシュタイン、ミュラーらの活躍によって鎮圧されました。内乱が起こった原因の一つが、この年に制定された帝国憲法への不満(いきなりシリ阿斯)だったと言うことで、皇帝ラインハルトは憲法や民主主義に詳しい(と言われれば、きつと頭をかいて照れるでしょうけれども)ヤン・ウェンリー夫妻を帝都へ招くことを決定します(かなり強引な設定です)。

〜と言うことで……

「祭だあ!!」

雄叫びを上げたのはやはり『あの人』ビッテンフェルトである。

—— 毎度同じパターンで恐縮です…。

「騒ぎは収まったことだし、後始末もそろそろ終わる。ここは祝いに一つぶわーっと行こうじゃないか」

毎度、ビッテンフェルトの強引な論理にあきれ果てる帝国首脳たちだったが、今回は違った。

帝国憲法の制定や、アレク皇太子の正式な立太子などなど、祝い事目白押しになるはずだった帝国暦一〇年が、ローエングラム王朝そのものが危うくなるような大反乱でてんやわんやの状態になった。秋も深くなつてようやく後始末も一段落し、意に反して叛乱に巻き込まれた将兵には一時金と休暇が与えられたことで、晩秋

の帝都は時ならぬホリデイ・シーズンを迎えていた。

そして、一般将兵はそうやって時ならぬ休暇をエンジョイしていたとしても、高級士官たちはそうそうは休めないのも事実。

とは言え、『刻苦精励、奮励努力、二四時間戦えます、皇帝万歳』が信条の帝国軍首脳にしても、全身が冷や汗でいっぱいになるような内乱の後である。

「だから祭だ。ちよつとは羽目を外さねば、肩が凝ってたまらん」と叫ぶオレンジ色の髪の大將に、誰も正面から異を唱えなかったとしてもまったく不思議ではない。

では、誰が皇帝ラインハルトに上申するのかわかるといふものようにもめている彼らに、今回ばかりは珍しい助け船が出た。

「諸卿のご希望は、わたしが皇帝陛下に申し上げてみましょう。もとより皇帝陛下は、今回の内乱での諸卿のお骨折りを何より誼み給うところですから、ささやかな報酬として何かのイベントを催すことに反対はなさりますまい」

国務尚書マリンドルフ伯自身が、“内乱で最も骨を折った”文官の一人だったことも事実だったから、その上申はあっさりラインハルトの裁可するところとなった。

「いいだろう。皆の骨折りには何らかの慰労が必要だと思っていたところだ。一日や二日、羽目を外したところで、予の治世の隙と誹られることにはなるまい。期日、内容は適任者を選び、実行委員会を作って任せよ。名誉実行委員長には：そうだな、ビットエンフェルトがよからう」

かくして、帝都を挙げた、夏祭ならぬ『秋祭り』の開催が決定された。

☆☆☆

「早食い競争……だど？」

統帥本部総長は激務である。

上司として帝国宰相、そして皇帝がいるとは言っても、実際に帝国軍を動かす最高の権限は統帥本部総長にある。彼の指一本で、合計二〇万隻の宇宙戦艦と三〇〇万人以上の将兵が動くのだ。しかも、三〇〇〇万人を動かすために、その倍のバックアップの人間が働くのだし、彼らへの指揮系統の行き着く先はやはり統帥本部総長なのである。事実上、一つの国を動かしているとさえ言えるほどの巨大な権限だった。

権限が巨大だけに、当然、仕事も多い。

有翼獅子の紋章が捺された招待状を渡され、ロイエンタールは眉をひそめた。

「『獅子の泉の元帥たちによる、優雅なる早食い夕食会』だど？」深夜を過ぎて帰宅したロイエンタールを、彼女は別に出迎えたつもりはなさそうだった。

「まだまだこき使う気だけれど、それだけだと申し訳ないから美味しい食事をさせてあげようってことね：料理が皇妃陛下のお手作りでないことを祈るわ」

憎まれ口を無視して、陪席者のリストに視線を走らせる。ビットエンフェルト、アイゼナツハ、ファールンハイトにクスラーとミューラーあたりはいいとして、軍務尚書の名を見いだしてロイエンタールは肩を竦める。

単に早く食べるだけではなくて、『より優雅に、よりスマートに、そして早く』食事を終えた人物を『帝都で最も優雅なる早食家』

として賞賛しようという趣旨そのものは悪くない。しかし、それにしては我が皇帝まいんがくさうから直接のお招きを頂いた晩餐会というなら、ありがたくお受けするところだが、慰労のイベントごときに元帥を駆り出すとは、宮内省も最近どうかしてしまったのではないか。

それに、よりによって軍務尚書も参加とは。

「あやつの陰険漫才が出し物というのでは、せつかくの食事が不味くなる。疲労の宴でしかないではないか」

——陰険漫才でも漫才と言うからには相方が必要です、元帥。軍務尚書の相方が統帥本部総長その人であるというのは、帝国内外でのコンセンサスなんですが——

音にならない“プチッ”という音がしたようだった。

「余計な解説をやめんか、卿は!!」

「誰に向かつて言っているのよ。いよいよ、お前もこのあたりが危うくなってきたのではないの」

こめかみのあたりを指した人差し指をくるくると回してみせる女に、ロイエンタールは冷笑で応じた。

「コロッケとタワシの区別も付かないような奴に言われる筋合いではないな」

「そんな下賤の食物など、どうして私が知っているはずがあつて? そうそう、わすれるところだったわ。招待には別の意味があるそうよ」

ロイエンタールは耳を疑う。

「優勝者には、皇帝陛下から特別の報償として、一つに限り、その者の希望するところを皇帝陛下にかなえていただける……だとい?」

「伝えたわよ。あとで聞かなかったなんて言わないで頂戴」

振り返りもせずにサロンを立ち去っていったのにも、ロイエン

タールはすでに気づかない。

そんな馬鹿な話があるか。たかが祭のイベントの、それも早食い競争の食事を優雅に早く済ませたというだけで、『何でも我が皇帝まいんがくさうに聞き入れて頂ける』だと。そんな美味しい……いや、否、ナインそんなたわけた話があつていいのか!?

いったんは閉じられたサロンの扉が開き、クリーム色の髪が覗いた。

「言い忘れていたわ。皇帝からの報償をもらうためには完食が絶対の条件だというのを」

「完食?」

「出された食事で、食べられるものはすべて食べること、よ。語彙が貧弱ね、相変わらず」

不当きわまりない批判を容赦なく浴びせた後、応答も待たずに再び扉は閉じてしまったが、もはやロイエンタールにはどうでもよかった。

ヘテロクロミア金銀妖瞳が、妖しい青と鋼の黒の煌めきを満たしていた。

『何でも我が皇帝まいんがくさうに聞き入れて頂ける』

——そんな素晴らしい、望外な……いや、そんなバカなことが実際にあるなどとは信じない。だが、万が一にも冗談半分にもそんなことを我が皇帝が約され、そして万々が一にも軍務尚書にそのとんでもない報償が下されるようなことがあつたりしたらどうなるのだ!?

我、出席せざるべからず!!

明日、さっそくレккеンドルフにはスケジュールの調整を命じよう……決意も固い統帥本部総長閣下だった。

翌日、軍務省。

「おかしなことを聞くものだ。たかが、夕食を早く食べ終えたからと言って、皇帝陛下がそのようなことを許可されるわけではないではないか」

ドライアイスの剣とあだ名される視線をまともに向けられて、フェルナーは肩を竦める。ただし、あくまで外形だけ。この程度で本当に冷や汗をかいているようでは、一日で胃壁に穴があくというものである。

「いずれにしても正規の話ではあるまい」

「は、左様です。先日、ヴェストパーレ男爵夫人にお会いした際に、そのように伺いました」

「ヴェストパーレ男爵夫人……か」

無表情な義眼が、一瞬だけ奇妙な光を放ったのをフェルナーは見逃していない。

招待状は昨夜、オーベルシュタインの忠実な執事であるラーベナルトに伝えられていた。招待を応諾する旨を回答すべく、呼び出したフェルナーが例の噂……フェルナーはイベントの趣旨として伝えてきたのだが……を持ち出したのだ。

「男爵夫人は、かつての宮廷の女性方とは異なり、根も葉もない噂をやたらに口伝えする方ではないと心得ますが」

「卿が女性への評論に優れているとは寡聞にして知らなかった」

冷ややかな応答が、フェルナーの饒舌を遮る。

「よろしい。宮内省には出席する旨を回答せよ」

命令を承知したしるしに深々と一揖するフェルナーの頭上を、

あくまで平板な口調の声が流れた。

「噂は、真実のかけらという種から生まれた巨樹だと言ったのは、誰だったかな」

「は———？」

「別に意味はない。下がってよろしい」

☆☆☆

そしてイベント当日。

会場に当てられたのは王宮の一角、『黒鷲の間』。正規の儀典場である、王宮最大の『黄金獅子の間』はさすがに割り当てられなかったが、『黒鷲の間』もまた『黄金獅子の間』に次ぐ広さを誇っている。

ダイニング・テーブルに着いたのは、招待者……というより挑戦者……のリストにあつたとおり、ロイエンタールをはじめとして、オーベルシュタイン、ミュラー、ケスラー、ビットテンフェルト、アイゼナツハ、ファーレンハイトの七名。

審査員席には『美の裁定者』と称してヴェストパーレ男爵夫人を審査委員長に、シャフハウゼン子爵夫人ドロテアを含めて彼女のサロンのメイン・メンバーが並んでいる。さらに僚友たちからの視線を一身に受けて、いささか居心地悪そうなのはメックリンガー参謀本部長。公衆の面前でこともあろうに早食い競争など、メックリンガーの美意識にあわないことおびただしいのだが、その一方で『食べ方の早さと優雅さの調和のみごとさを裁定するのよ』と男爵夫人に言い切られては、正面切つては否定できないのも確かだった。周囲に設けられた観客用テーブルには、高級士官だけでなく中下級士官から一般兵士、一般市民までが興味津々の視線をメイン・